

---

# 異世界とオレと迷宮と？？

RAI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界とオレと迷宮と???

### 【NZコード】

N3470N

### 【作者名】

R A I

### 【あらすじ】

高校を浪人したオレは、RPGにはまっていた。一般的に廃人と呼ばれる域までに達した。

ある日一通のメールが届き、俺は異世界へトリップした…。

## 魔法募集

魔法を募集します！

2～3個考へ付いたのがあります、イメージが偏りすぎて戦闘  
がマンネリ化する可能性があります！

皆さんお願いします(――) m

私に知恵を貸してください。

すみません本気です。

できればメッセージで送つて欲しいです。まとめやすいので。

普通の魔法・・・大歓迎です。

召還獣・・・バハムートとかの一次は無しド

ネタ武器、ネタアイテムも募集します。

募集期限は設定しないので、よろしくお願いします。

## キャラ設定(前書き)

キャラのステータスなどをのせておきます。

物語のあとがきにものせてるので、ただの皿山謹写です。

どうもこので読み飛ばしてもOKです。

## キャラ設定

キャラ設定です！！話別にのせていきます。

一話

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア(弓)

ステータス

ロープ

L V . i

D P	A P	M P	H P	L V . 3
2 5	1 2	3 4	3 9	2
6	4	7		

アリア 女 ハーフエルフ

装備 無し

ステータス

D P	A P	M P	H P	L V . 3
2 5	1 2	3 4	3 9	2
6	4	7		

二話

クロノ 男 エルフ?

装備

グリンディア(弓)、ロープ、布の靴、グローブ

ステータス

L V . 1

H P 3 4 9

M P 2 4 5

D P 5 9 7

A P ? ?

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ

ステータス

L V . 3

H P 3 9 2

M P 3 4 7

A P 1 2 4

D P 2 5 6

三話

クロノ 男 エルフ?

装備

グリンディア(弓)、ロープ、布の靴、グローブ

ステータス

L V . 4

H P 3 9 4

H	P
4	2
L	V
·	7

装備

グリンディア(弓)、ロープ、布の靴、グローブ

ステータス

クロノ 男 エルフ?

六話

使用魔法 ウォーター・ボール、ヒール

D	P
2	7
A	P
1	5
M	P
3	7
H	P
4	2
L	V
·	5

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ  
ステータス

アリア 女 ハーフエルフ

使用魔法 ファイア・ボール、ウォーター・ボール、サンド・ボール、  
プラス・スト・ボーラー(ゾウ・ボーラー)  
ゴリアテ(三倍も)

D	P
5	9
A	P
5	8
M	P
4	6
P	2

A	M	H
P	P	P
6	5	4
4	2	2
5	4	3

Lv. 7

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ  
ステータス

## 装備

クロノ 男 ハイエルフ

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

D	A	M	H
P	P	P	P
2	1	3	4
7	5	7	2
3	3	4	6

Lv. 5

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ  
ステータス

アリア 女 ハーフエルフ

使用魔法 ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、  
プラスチックボール（ゾンボール）  
ゴリアテ（三倍も）

D	A	M
P	P	P
6	6	5
9	9	2

D P 6 9 2

使用魔法 本人が知っている魔法全て

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ  
ステータス  
L V . 6

D	P	3	0	3
A	P	1	8	3
M	P	3	9	4
H	P	4	6	6

使用魔法 ウォーター・ボール、ヒール

## 0-1話～始まりと出会い？

俺は年齢的には高校二年の男である。あまり顔立ちも良くなく、スポーツもできない。学校にも行っていない。そう、浪人である。受からなかつたのである。今はいわゆる『ニート』をやつている。勉強する気もない。

そんな俺が、今ハマつてするのがRPGだ。なんと言つてもあのコツコツ感が堪らない。美少女なんか出でると…最高だ…。

俺はいつもどおりRPGをやつしてたら一通のメールが届いた。

「…誰だ？メールをしてきそな友達は居ないぞ？」

とりあえずメールを開いた。ところが、画面がブラックアウトし何も表示されなくなつた。

「はあ？」

と思いつつも、しばらく待つてみた。十分ぐらいだらうか。画面に入力画面が出てきた。

『貴方の性別は？』

『無論男だろう』

『貴方の種族は？』

『種族？まさか、RPGか？ええっと？』ヒト、獣人、エルフ『か。エルフだな。』

よし！と決定をクリックした瞬間、俺の心臓が止まつた…。

俺は薄れ行く意識の中何も考えることができなかつた。

\*\*\*

俺は、草むらの中で座っていた。ここはどうだろ？俺は死んだのか？肌触りの良い服を着ている。右手には長い弓を持っている。左手で耳を触つてみた。えつ？尖つていてる？？

さほど遠くない所でヒトと何かが戦っている。距離は：2～3キロ？あれ？おかしい。俺の耳つてこんなによかつたっけ？

そう思いつつもヒトを助けるべく俺は走り出した。

体が軽い。速く動ける。速く、もつと速く。そうしているうちに戦っているそばの丘の上についた。

見たところヒトの方が劣勢だ。ヒトの方が数で勝っているが、魔物？の方が力が強く人の攻撃が効いていないように見える。俺はすぐさま弓を構えて矢をつがえる。

見よう見まねだが、まるで磁石でも付いているように矢は魔物の頭に吸い込まれていく。さらに一本、三本と放つていき魔物を全滅させた。魔物は人型だった。

とりあえず、村人たちに近づいてみる。

「有難うございました。今、代表の者を読んできますので少々お待ちください。」

そう言つて走つていった。ん~。なんか嫌だな。こんなに敬語使われたこと無いぞ？

考え込んでいると突然話しかけられた。見た感じ村長のよつだ。村長「村を守つていただき有難うございました。この村の村長のダルクといいます」

中々体格のいいおっちゃんだ。

「どういたしまして。それよりもむつきは何ですか？」

「さっきのはこの辺に住む魔物です。ある程度の群れを作つて生息しているようで…。ご存知ないんですか？」

「えつ、ええ、まあ」

「今夜はどうされますか？もし泊まつてくださるなら、最大限のおもてなしをさせていただきますが。」

「いいんですか？じゃあお願ひします。」

「ええ。どうぞ、いらっしゃります。」

そう言つて、先頭を歩いていった。村の人は様々だった。腕にも毛が生えている女性もいたが、人の方が多いようである。

建物も、木と藁で作つた簡単なものだ。村長の家についた。正直言つて豪華だ。

村長に中へ通される。中も豪華だ。それにしても、他の家との違いはなんだ？

「お部屋の準備が整うまで、この部屋で少々お待ちください。」

「はい。そういうえば、まだ名乗つていませんでしたね。俺はクロノ

…？クロノ…」

なんでだ？自分の名前がわからない。

「クロノ様ですか。私はダルクといいます。」

「はつ、はい」

「それではじゅっくり。」

そう言つて村長は出ていった。

「ふー」

それにしてもなんでだ？自分の記憶がない。  
名前…分からぬ。うーん…。

「あつ、あの。」

「ん？何？だ…。」

美少女だ……それも絶句するほどの。髪はまっすぐに伸ばしており柔らかな金色だ。目は青く、クリツとしている。スタイルは抜群によく、胸は手のひらから少しあふれるぐらいに盛り上がっている。かといって、大きすぎる事もない……俺のぴったりだ。

「ク、クロノ様っ！」

「…」

「私を仲間にしてくれたさこ……！」

「はあ？」

俺の記憶が正しければ、人はエルフを恐れるはず……。

「俺はエルフなんだ。」

「えつ？で、でも怖くありませんよ？？」

「えつ？」

「はあ……じや『こりー！アリア！』」

アリア「…」

アリアと呼ばれた女の子は逃げていった。

「家のアリアが失礼をしました。すみません」

『家の…といひことはむちのこと話しておいたほうがいいな…

「いえいえ。それよりも、アリアちゃんに仲間にして…って頼まれたんですけど…」

「そうですか…アリアが…では、連れて行ってください。」

「はあ？何ですか？」

「い、嫌ならしいんです！すみません。」

「いや…別にいいんですけど…。何故です？」

「アリアは…人とエルフの間に生まれたんです。人に近いですが、人より魔力が高く恐れられています。」

「なので、生まれたときから周りに避けられているんです。」

「ふー…。わかりました。でも、なんで私なんですか？」

「強いから…？」

「ようにはなんとなくらしい。」

>>>アリアが仲間になつたくくく

## 01話～始まりと出会い～？（後書き）

<補足説明>

最初に言います！主人公は死んでいます。主人公の武器は謎の空間（現在）にあり、出し入れ自由です。

クロノ 男 エルフ？

装備  
グリンディア（弓） ロープ

ステータス

L V : 1

D P	A P	M P	H P	L V : 3
2 5	1 2	3 4	3 9	2

アリア 女 ハーフエルフ

装備 無し  
ステータス

D P

1 2

4

7

2

6

アイテム

一四〇

俺は今村長の家にいる。ベッドも柔らかい。と、言つてもスプリングベッドには敵わないが…。

弓は、体の中に吸収されていた。なんとなく念じれば出でへる。

「すみません、お食事の用意がでませんでした。」  
「わかりましたあ～」

今話しかけてきたのは、部屋の外にいる使用人だ。確か・・・アンナさんだつた気がする。結構かわいい。こう・・・なんか、守つてあげたくなるような感じ。つーか、間延びした声になつてしまつた。

リビング？に降りたら、豪華・・・と思いきや普通の食事が並んでいた。少し硬そうなパン。謎の野菜が入っているスープ。野菜の和え物だ。正直俺感覚で言えば少し質素な感じだ。

「どうぞ、此方にお座りください」

村長が客人とはいへ、普通の人に頭下げまくるのはどうかと思う・

「はい。」  
よしー今日は間延びしない声が出た（笑）

さつきから無音だ。食器もフォークも木製なのでほとんど音がない。ある音といえば咀嚼の音・・・。しかも俺だけ・・・。村長とアリアはまるで貴族のように静かに、優雅に食べている。

「クロノ様はどうやらへ向かわれているのですか？」

「えつと・・・」

俺はこの世界の地理についてまったく知識がない。とりあえず適当に・・・

「実は今までひとつのことにも落ち着いたことがないんです。しかし、これからはアリアさんも一緒に旅になります。ですので、自分としてはひとつ所に落ち着きたいです。どこかいい町はありますか？」

「うーん。王都の近くにある『カルム』はどうですか？あの町なら、ギルドもありますし王都が近いので物流も盛んです。」

「でね、とりあえずその町に向かいます。」

いつもこの世界の記念すべき？第一食が終わった。

部屋に戻った俺は、今の自分の状況について考えた。

まず俺は、自分のことを忘れてる。下の名前は思い出せない。前の世界のことはある程度は覚えてる。しかし地名や人名などは思い出すことができない。

俺はこの世界についてまったく知らない。まあ、当然だが・・・

こんなものであろうか・・・。そういえばこの部屋には油に糸をたらしたランタン？があるだけだが十分に明るく感じる。

昼間の戦闘のときも、遠くの音が聞き取れた。身体能力も上がつてこると考えてもいいだろう。

ローブをよく見てみると、何かわかった。防御力が高く、丈夫だ。  
という大体のことはわかつた。

・・・わけわからん。そろそろ寝るか

～一日目～

おそらく朝早くにおきた。田覚めがいい。

水で顔を洗い、昨日夕食を食べたところに行つた。昨日の夕食とは違ひ、肉料理がある。

しかし、それも村長の前だけでアリアの前にはない。村長の顔を見るとあからさまに『しまった・・・』という顔をしている。

それから5～6分、話し合ひ・・・。

そこで話したことをまとめると・・・

エルフは肉を食べるのを嫌う

だから夕食はは肉を出さずにこまかく食べていた

アリアはこれから旅一緒にをするので  
肉のない生活慣れさせておこうと思つた

こんな感じ？

それで俺は・・・

『自分は肉が好きだ』

とこう」とを伝えた。

これにて一件落着。俺やアリアの前に肉料理が出てきた。

朝食の後、旅で使うものなどを買つたために町へ繰り出した。  
武器屋、防具屋で分かれているようだ。とりあえず、アリアの防  
具を揃えるために防具屋へ向かった。

防具には頭／胴／腰／脚／靴があるわいだ。一般的には、頭と胴、  
靴を装備するのが基本らしい。

村長にたんまり？お金をもひつっているので、値段的には問題ない  
だろつ

「革の鎧を見せてくれ」

店主にこうとすぐに持つてきてくれた。

「ちょっと、つけてみてくれるか？？」

「ん~、少し重いですね」

「じゃあ、これならいいですか？」

次に店主が勧めてきたのは革のジャケットだ。  
これも試着してもらひつ。

「ん、んつ」

がんばって、ジャケットの紐を締めている。しかし、ちょっとき  
つそうだ・・・胸が。ふにゅん。と潰れている

少し田に悪い、いや、田の保養になるか。おい！店主！鼻の下伸  
ばすな！

ほかには、革の膝当て、革のブーツを買った。

なんだかんだで、アリアの防具は整った。次は俺のだ。胴はローブがあるからいいとして、靴だな。俺は動きやすそうな布の靴を。弓を扱うので、布のグローブも買った。

お値段の合計は…革のジャケット 560メル

革の膝当て 170メル

革のブーツ 230メル

布の靴 220メル

布のグローブ 100メル

合計で1280メルだ。大金貨が10000メルで、金貨が100メル、銀貨、銅貨が100メル・10メル小銅貨が1メルだから。金貨一枚と銀貨一枚。銅貨八枚だな。

次に武器を買う。できるだけいい武器を買いたいものだ。自分の武器はあるから、アリアの分だけを買えばいいだろう。

「すみません。どういう武器がありますか？」

「剣、槌、片手剣、槍などがあります。」

「どんな武器を使うんだ？」

「お義父さまに習っていたのは、片手剣だけです。」

「店主。片手剣のお勧めはあるか？」

「ここにあるものだと、銀の片手剣ですね。」

「ちょっと、持たせてくれるか？」

俺が店主に聞くと、店主は快くOKした。

「いいですね。軽くて振りやすいです。」

「それでわそれを。」

と言つと、店主がひどく驚いた顔をした。軽く深呼吸して落ち着くと商談を始めた。

「ほん。えー、お値段は13500メルになります。」

ああ、なるほど。値段に驚いたのか。村長にもらった金はあわせ

て50000メルを超えていたので問題ない。

「わかりました」

そう言つて俺はカウンターに大金貨や金貨を置いた。

「・・・・」

店主は絶句している。ようやく、置かれた金貨に気がつくと慌てて動き出した。

「あ、ありがとうございます。」

頭に汗が見えていた。いくらなんでも慌てすぎだわ。

買い物が終わって村を歩いていると突然アリアがしゃべりだした。

「ほんとに良かつたんですか！？」

「ん？ 銀の片手剣のことか？ 別にいいぞ？」  
値段のことだろうか？

「・・・・」

なぜだろう、沈黙した。

買い物が終わったら村長に行くよつと言っていた家へ向かう。そこは魔法使いが住んでいるらしく魔法の基本程度なら一日でできるようになるらしい。

「ふう。けつこう遠いな」

「そうですか？」

アリアはかなり歩きなれているようだ。旅では置いて行かれそうだ。と、くだらない事を考えていたら田舎の家に着いた。

キノコの家・・・ではなく、普通の家だった。  
とりあえず口を開いた。

「・・・・」

もう一度。

「・・・・」

「失礼します。」  
中を見るとたくさんの紙や道具が散らばっている・・・」ともなくきれいに片付いている。

中に入ると突然斜め前からボウガンの矢が飛んできた。俺は紙一重でよけると、体の中から弓をだし矢をつがえ矢が飛んできた方向に向ける。しかし、そこには無機質な丸が描かれているだけで何もない。矢をあおると前から2mは軽く越している巨人が出てきた。

「誰だ  
「・・・・・」

「誰だ」

どうやらロボットのようにもう少し同じ事を繰り返すようだ。

「俺はクロノ。村長の紹介で来た。」

巨人は黙つて下がつていった。

続けて出てきたのは130センチあるかどつかわからぬ小柄な女の子だった。魔法使いの弟子だろうか。

「私はシクと申します。村長から話は聞いていました。そして、先ほどは失礼しました。お怪我はなかつたでしょうか。」

とても澄んだ声だ。

「ええ。大丈夫です。それよりも何故あのよつな仕掛けを?」

「私が研究した書物を狙つた盗賊が入つてくることがあるからです。私の書物は高く売れるよつなので・・・」

「私の...と言つことは貴女が魔法使いなのですか?」

「はい。もう歳なのでたいした魔法は使えませんが。」

「歳・・・? 美少女に見えるが・・・」

「魔法で外見を変えているんです。本当はおばあさんなんですよ。」

「魔法で外見を変えているんです。本当はおばあさんなんですよ。」

「私でも魔法を使えるんですか？」

「ええ。すべての人が魔法を使うことができます。もちろん、個人差はあります。」

「教えてくれますか？」

「ええ。もちろんーそれを村長に頼まれたのですから。」

「ではまず、貴方の体の中にある魔力を感じ取つてもらいます。手を出してください。手の上に魔力の塊を乗せます。」

シクが手の上に手を重ねると、自分の手の上に何かが乗っているのがわかる。

「これが魔力です。貴方の体中にあるので探してみてください。」確かに頭からつまさきまで、体中にそれを感じることができます。「ありましたか？では、それを手のひらに集めてください。ゆっくりと。」

ゆっくり集めてみる。体がだるい。

「濃い…こんな濃い魔初めて見た…」

「魔力に濃い薄いつてあるのですか？」

アリアがとても不思議そうにたずねる。

「ええ。魔力が濃ければ同じ魔法でも攻撃力が上がります。手のひらに乗つている魔力を体の中に戻してください。」

不思議な心地よさとともに魔力が体の中に戻つてゆく。

「では、こちらへきてください。」

その家のさらに奥へと進んでいく。突然回りが白くなり広い空間に立つっていた。

「今から魔法を使つてもらいます。この空間の壁には魔法を防ぐための結界を張りました。まずは火系の魔法を使つてもらいます。」

「魔法を使うには、その魔法の具体的なイメージを持つことが必要

です。ファイアボールだつたら燃えている玉をイメージすればいいんです。では、やってみてください。」

俺は、頭の中に火の玉をイメージし小声でファイアボールと唱える。目の前に火の玉がでて、すぐに消えた。

「すごいですね・・・。一発で出来てしまふなんて。」

「えつ？大抵の人はすぐでできるようになるのでは？？」

「そんなことないですよ。よほど才能がない限り最低で1年以上、訓練してファイアボールができるようになります。」

「弓矢を魔法で作ることはできますか？」

これは完全に思い付きだ。これができるなら矢を持ち歩かなくてもいい。

「できると思います。ちょっとやつて見てもらえますか？」

「ええ。わかりました。」

頭の中に矢を思い描く。軽い気だるさと共に手に矢が出てきた。

「これは使える……」

この後は、いろいろなレクチャーを受けた。

人にはそれぞれ得意属性があるとか、得意属性以外の魔法はうまくいかないとか、普通ひとつかふたつの属性しか扱えないとか…とにかく俺は規格外らしい。

それと、俺には治癒系の魔法が使えなかつた。その後アリアも同じ事をやつていたが、水系と治癒が得意魔法らしい。

うん。バランスがいいなあ。弓矢も魔法で作れるし。あつ、もしかしたら雷とかの矢も作れるんじやね??

魔法使いに礼をいい、すでに暗くなっている外へ歩いた。村長の家へ向かう。明日出発だ。

「先せんにあたるやうに……」

۱۰۰

突然村の入り口から悲鳴が聞こえた。

「魔物？」

アリアはそういうと駆け出していった。慌てて俺も追いかけてい

## 02話～村にて～（後書き）

>補足説明<

お金について・・・

単位はメル！

大金貨	10000メル
金貨	1000メル
銀貨	100メル
銅貨	10メル
小銅貨	1メル

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア(弓)、ロープ、布の靴、グローブ

ステータス

LV:1

H P	349
M P	245
A P	???
D P	597

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ

ステータス

LV:3

D	A	M	H
P	P	P	P
256	124	347	392

駄文ですががんばりたいのよろしくお願ひします。  
誤字、脱字あるかもなのでご指摘、ご指南よろしくお願ひします。

次回は戦闘です。

### 03話 ～魔物襲来～

慌てて駆け出していつた俺とアリアが見たものは魔物の大群だった。腕が3本だつたり、口が大きかつたりするが、少なくとも200はあるだろう。

20人近くの人が武装して戦っているが既に押されている。アリアは腰にさしていた片手剣を抜刀し、戦いの中に身を投じた。

俺は体の中からグリンディアを取り出し、魔法で矢を作る。その矢を放ち、また次の矢を作る。体力的な方ではない、別の疲れを感じていた。おそらく、魔力を消費したためだろう。前のほうでは確実に魔物の数が減っていた。しかし、その後ろにもまだまだ魔物がいる。このままでは埒が明かない。

俺は魔法を使うためにイメージを広げる。

(一度に多くの魔物を葬るには、範囲の広い攻撃が必要だろう。必要なのは大きさと、攻撃力。火の玉は無理だ。水は回りに被害が出るから論外。雷は範囲攻撃には向かないし、風も同じ。土は…どうやって使うんだ?論外。いや、待てよ。大きさがなくても持続すれば…)

イメージを固めた俺は、小声で  
(ゴリアテ)  
と唱えた。

目の前の土が盛り上がり、形を成していく。もう一回、小声で同じものを唱える。土人形のようなものを三つ作った俺は、魔力に物

を言わせて自分が『敵』と認識したものを攻撃するようにプログラミングした。さらに、魔力で土の表面を覆つて崩れないようにする。

三体のゴリアテは、俺の思惑どおりに魔物の方へ向かっていく。戦っていた者たちはぎょっとしていたが、ゴリアテが魔物を攻撃し始めると自分たちも攻撃し始めた。

もう半刻ほどたつたがまだ魔物たちが途切れる様子はない。既に、最初戦っていた者たちも数人負傷している。

俺は、もう三体のゴリアテを作つて送り出した。

これでも若干おそれ気味だ。俺はさつき思いついた、矢に属性をつける。をやつてみることにした。火の矢、をイメージする。

「熱つ！」

それはイメージどおりにできたが、熱くて放してしまった。ただ燃えているだけではだめだつたらしい。敵に当たつてから燃えるというはどうだろうか。ちゃんとイメージしてから発動する。

手に矢が出てきた。外見は普通の矢だ。魔物に放つてみると、おお、燃えた。結構疲れる。

魔力が少なくなってきたのだろうか。疲れた。魔力は自然に回復するらしいがおそらく寝ないとだめだろう。まだ、普通の矢を出せるから

一

「ギヤオオオオオオオ」

「「「」」」

あまりの声の大きさに、その場にいた人が全員硬直した。

「お、オルトロスだ！！！」

誰かがそう言つた瞬間、戦っていた者の半分が逃げ出した。しかし、半分は何か決意をしたような顔をしてそのまま魔物と戦つている。

「グルルルル」

魔物が一体真上に飛ばされた。一體、三体 次々と飛ばされていく。どうなってるんだ？

ようやくそいつが見えてきた。ケルベロスの頭をひとつ減らしたような奴だ。確か、ケルベロスの弟だ。たてがみ鬚は一本一本がすべて蛇になっている。

オルトロスはふたつの頭を振り回して魔物を吹き飛ばしている。何故だ？仲間割れか？いや、違う。邪魔だったのだ。前に行くのに。

オルトロスが前線で戦っている者の目の前に来た。  
ゴリアテが攻撃を仕掛けるが、ある者は大きな牙で、ある者は前足で破壊された。時間稼ぎにもう4体ゴリアテを生み出すが本当に魔力がきつい。こいつらもすぐに撃破されるだろう。何か対策を考えなければ・・・

ゴリアテが戦っている。どうすればいいのか。

あつ。わかった。ゴリアテが小さくて簡単にやられている。単に大きく、強度も上げてみるか。

そう考えた俺は、さつきの大きさの3倍で、体の表面を覆う魔力

をできる限りあげてみた。予想通り・・・いや、それ以上だつた。オルトロスの噛みつきを左手で止めると右手で頭をに殴つた。さらにもう片方の頭も殴ると、プロでも認めるであろう見事なボディブローを決めた。

オルトロスは巨体を大地につけ、消えた。

さつき出した巨大ゴリアテに残つた魔物の相手をさせている。村の近くにいた魔物は全滅していたが、少し遠くにいる魔物が数体いたので弓で葬ることにした。一体、二体と順調に葬つていったが三本目の矢を作り出そうとした瞬間、意識が途絶えた

## 03話 ～魔物襲来～（後書き）

>補足説明<

クロノ 男 エルフ？

### 装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ

### ステータス

L	V	.	4
H	P	3	9
M	P	4	6
A	P	5	8
D	P	5	9
		9	7

使用魔法 ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、

プラスチックボール（↓↓ボール）

ゴリアテ（三倍も）

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ  
ステータス

D	P	A	M	P	H	L
2	7	1	5	3	4	V
3	3	3	7	4	2	5

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

戦闘書くのは難しいですね。それに少し短いです。  
次回はもつとがんばります。

## 04話 ～騒動～

田覚めるとカラダの近くに暖かく柔らかい感触があった。しかし意識は再び闇へと引きずり込まれていった。

気持ちのいい朝だった。窓からは心地いい光が差し込み、体の調子もいい。昨日も降りた階段を降り、リビングへと向かっていく。そこには凄く『良かった』と緩んでいる村長と、今にも泣き出しそうな顔のアリアがいた。一人の前にはやわらかそうなパンやスープ。ミディアムに焼かれた肉。噛むとしゃきしゃきしうつなサラダがあつた。

そういえば凄く腹が減っている。まるで何日も何も口にしなかつたような・・・、そんな感じだ。

「やつとお田覚めですか！」

「ああ。『やつと』って事はどうぐらに眠っていたんだ？」

この世界に来てから、言葉から何かを見つけることがうまくなつていた。

「およセニロほどです。魔力を全部消費していたようなのでアリアに添い寝をさせました。」

(ん?添い寝?あの柔らかい感触つて…)

「……！」

「な、何か失礼なことはありませんでしたでしょうか！？」

当然廃人だつた俺に彼女が居るわけもなく、女性経験もなかつた。

「なつ、何故添い寝が必要だつたのでしょうか？」

「魔力を消費しすぎると生命を維持する能力が低下します。これは、急激に魔力を回復させるためにマナを消費するためです。マナとは生命エネルギーのことで、これがすべてなくなると死にいたるとされています。

生命を維持する能力が低下していたので、体温も低下します。それを防ぐために添い寝をさせました。」

「…………」

アリアが顔を真っ赤にしている。耳まで真っ赤だ。

「いや、なかつたはなかつたけど……。」「はあ……。」

村長がとても心配そうな顔で見てくる。

「その……多分……ですけど、交わつたんですよね。はい。」「…………」

今度は村長が沈黙しちゃつたよ。じつじよ。

あえて、口から切り出してみる。

「とりあえずお腹が減つたんですけど……食べませんか？」「ええ。（はい）」

またまた無言。食器が擦れる音のみ。凄い気まずい。

「ちょっと席をはずす。」

そう言つて村長はアリアと共に廊下へ出て行つた。

「~~~~~」

ちよつと聞き取りにくいが頑張れば聞き取れないこともない。

「お前はそれを分かつてやつたのか！」

「はい。お義父様。」

「くつ・・・・・」

いつもの温和な態度が嘘のようだ。

「もう、勝手にじり！つたく、奴隸市から買つてきて楽しみにしていた物を！――！」

戻ってきた村長にはいつもどおりのスマイルが貼り付けられていた。

アリアが奴隸？つーか、奴隸つて人徳的にOKなの？？

「――馳走様でした。」「――」

全員が食べ終わつたところで俺は話を切り出した。

「できればすぐこここの村を出ようと想つのですが・・・？」

「はい。分かりました。今から出ても十分間に合つと思ひます」

こつもどりの丁寧な対応・・・俺はそれが怖かった。

今は早朝である。ここに来てから俺も早起きになつた。

こよこよ玉糸である・・・

## 04話 ～騒動～（後書き）

>補足説明<

奴隸：奴隸は奴隸市で扱われる商品である。男はダンジョンを探索するための手駒として、女は性欲を解消するために購入されることができます。

短かつたですがつなぎです。できれば明日にほりゅうしたいとも思います。

## 05話 ～到着～

ここにきて五日ほどたつた。魔物いっぱいしたり、アリアが奴隸だつたり

隣にいるアリアは、そのまま髪を下ろしている。防具にしては軽い、レザー（皮）の鎧を着けている。鎧といつても、肩などの大事な部分のみを覆っている。腰には片手で扱えるような銀製の剣が刺さっている。

俺は、とても肌触りのよいローブのみだ。

魔法は自分で作れるみたいだ。今度何か作つてみよう。

田も高くなつてきたので出発だ。前には平原が広がる。

「最近では魔物も多く平原は危険なので、早めに行きましょう。」

すでに何体かの猛獸や魔物に出会つているが単に数が多いのだろう。

う。

「ああ、今日泊まるところまでのぐらいだ?」

「運がよければ後3刻ほどで着くと思います。」

「運がよければ?」

「この平原の魔物を束ねている魔物がいます。その魔物に見つかって帰つてきた者はいません」

「なるほど…」

「ただ一人だけ帰つてきた者がいます。その者が見たそうです…」

奴…私たちはグムと呼んでいますが、人型で腕が四本あるそうです。その者は一日後に死に、その年に育っていた野菜は枯れてしまったそうです。」

「まるで神話だな…」

「『 shinwa』ですか？？」

「昔話だよ」

「ああ。なるほど。」

「ここには何かないの？」

「ティゴレス昔話ですね。」

「どんな話なんだ？」

「ええと、この地方に伝わる伝説です。」

「話してくれるか？」

正直楽しみだ。

「はい！」

『これは遠い昔から伝わるお話です。

このグレゴリア地方は昔魔王が統治していた、という話があります。

魔王は心優しく、気候系の魔法を操る達人だったと言われています。  
村で日照りが起こつたら雨を降らせた： このような話もたくさん  
の村で語り継がれています。

しかし、王都で「魔王はこの国を支配しようとしたくらうでる」という噂がたちまち広がり魔王は処刑されてしまった。

魔王は怒り狂いました。王都は壊滅状態。それで、人々に「魔王は危険」というイメージを持たれてしまつたのです。』

「へえ～。」

「この話には続きがあります。」

『魔王は王都を壊滅させるとアリシア山脈の方へ飛び去つて行きました。魔王はそこで魔物を生み出していると言われています。このことから、悪者のイメージが強くなりました。』

「ですけど、おかしいですよね。村を助けていた魔王を捕らえるなんて…。」

「ああ、まったくだ。」

心の底からそう思う。恩は恩で返すべきだ。仇で返してはいけないと思う。もっとも俺は親に何もできなかつた上に、親よりも先に死ぬという超親不孝をしてしまつたが…。

様々な雑談をしているうちに田的のカルムへ着いた。

カルムの城門は大きく軽く俺の身長の5倍はありそうだ。今の慎重が1m85cmぐらいだから…結構でかいな。

基本的に誰でも入れるらしい。が、初めて入る人は入り口の衛兵に話しかけていると登録する必要があるらしい…めんどくせえなあ。

簡単だつた、登録。2~3枚の書類に名前書いて、謎のカードに血をたらすだけ。

そのカードが無いとこの町で何もできないらしい。宿泊まるにも、武具買うにもこれが必要らしい。

「とりあえず宿を取りましょ。」

「えつ？ 家を買ひんじゃないのか？」

「最終的にはそのつもりですが、まずはいい物件を探さなければい

けません。迷宮にもぐつてお金も稼がなければいけませんし……」「

つまり、現在は様子見で徐々に生活レベルを上げていく……と言つことでいいのだろうか?うん。きっとといいんだ。

今はとりあえず宿を探そう。

町を宿を探して歩き回る。外見はいい感じのところがあるがいまいちお値段がよろしくない。

長い間お世話になりそつなので女めのところがいい。

結局一晩一人で銀貨一枚のところに入った。部屋の中はいい感じで、ベッドも硬すぎず柔らかすぎない。ただ・・・ベッドがひとつしかない。どうしよう・・・まあ、気にするなー俺!何とかなるわ。

「今からギルドに登録しに行きましょ~」  
「主人様・・・」

「

最後に何か言つたがなんといったのだろうか?

「ああ。ギルドって何をするところなんだ?」

「簡単に言えばギルドメンバーに依頼をまわす仲介業者ですね。これに登録しないと、魔物や猛獸を退治してもお金がもらえません。登録すると、一般の方より安く薬を購入することができます。」「なるほど。」「さりにランクというものがあります。上から、キング、クイーン、ナイト、ピジョップ、ルーク、ポーンです。ランクに見合った依頼を受けることができるようになっています。」

「ふむ。とりあえず登録に行くか。」

「はい。・・・」主人様・・・

また、聞き取れなかつた。なんといったのだひつ。まあ、いいか。  
とにかく行こう。

「ギルドにて」

ギルドは3階建てだつた。1階で登録や依頼の受注などを行い。  
2階で武器アイテムなどの販売。3階はギルドの食事場やギルド職  
員の休憩ができるようになつてゐる。

今日用があるのは1階だ。ギルドのお姉さん（結構可愛い）に話  
しかける。

「今日はどんな御用でしょうか？」  
「今日は、このギルドへの登録に來た。」  
「かしこまりました。お連れの女性もでしょうか。」  
「いえ、ちゅう」そうです」・・・

アリアも入るつもりらしい。

「では、カードを見せてください。」

カードとは、この町に入るときに作ったあのカードだ。  
それを見せると職員は奥へ入つて行き、2～3分すると戻つてき  
た。

「はい。登録完了です。」

今から、ギルドについての説明をさせていただきます。

ギルドメンバーは月に十体以上の魔物か猛獸を狩らなければいけません。狩れなかつた場合は強制的にギルドから脱退せられます。

「

『以後、アリアの説明とかぶるので割愛』

ギルドへの登録が済んだ俺たちは宿へと戻った。

この宿は食事つきなので、夕食を済ませると部屋へといつた。

「ふう。」

俺がため息をつくとアリアは可笑しそうに笑つた。  
そういうえばアリアが笑つているところを見るのは初めてかもしれない。

突然アリアが何かに気づいたような表情をし、真剣な顔つきになつた。

「どうしたんだ？」

俺が尋ねると、

「実は・・・話があります。」

## 05話 ～到着～（後書き）

♪補足説明♪

特にないです。w

次回！明かされる驚愕の真実！！

ばればれの伏線ですみません。

ご意見！入れてほしい魔法！誤字脱字などなど！ありましたらお気軽に！！

## 06話 ～買い物～

アリアは凄く真剣な顔をして言った・・・

「実は・・・私は『ご主人様の奴隸なんです！』

「えつ？『ご主人様って誰？』

アリアが奴隸だと言つことは盗み聞きで知つていたが誰の奴隸かは知らなかつた。

「貴方様です、『ご主人様。』

「は？俺？何で？」

契約かなんかしたつけ？

「その・・・私の『はじめて』をご主人様に捧げたからです。」

なるほど・・・。交わることが契約なのか・・・

「なんで奴隸になつたんだ？」

「私にもともと兄弟がたくさん居ました。しかし、家は貧しかつたのです。だから・・・・・」

口減らしという奴だろ？か。そんな感じだろ？

「それから私を育てたのが村長です。だけどあの人の部屋からは毎晩艶かしい声が聞こえてきて・・・わたしもそうなるのかと怖くなつて・・・それで、それで・・・

貴方が優しそうだつたから、あなたの奴隸になつたほうがいいと思つて・・・グスツ

なき始めてしまつた。「うううとおはせばうすればいいのか・・・。といあえず慰めよう。

「大丈夫。アリアちゃんには何もしないよ。」と語つて、軽く抱擁してやつた。

じばうぐれのままでいたり、落ち着いてきたよつて泣き止んだ。

「ありがどうござこまづ。」

「じゃあ寝よつか

「はい。」

鼻声になつてた。

朝起きたら腕にアリアが巻きついていた。正直言つてやばい。生理現象がおきる。

何とかゆすつて起こした。どうやら朝は弱いらしく、ずっとボーッとしていた。アリアが寝ぼけたまま食事を取りにいく。

この宿は結構いいのではないだろつか。一食付きで銀貨一枚。これが普通なのか？

今日はギルドに行つて迷宮について聞く予定だ。

ギルドに着いた俺たちは受付嬢に話しかけた。

「ちょっと迷宮について聞きたいんだが  
「はい、何でしょ。」

「現在近くにある迷宮はなんだ？」

「ソルト迷宮がこの町から少し歩いたところになります。一度行つた迷宮は、この町の中からであれば念じることで入り口まで辿り着くことができます。」

「そうか。ありがとうございます。」

礼を言つて立ち去つた。

「じゃあどうあえずソルト迷宮に行くか。」

迷宮への道は詳しく聞いてある。

「はい、『主人様』

昨日の夜から『主人様と呼ぶことに決めていたのですが、正直言つてこっちが慣れない。

迷宮への道は簡単で近かつた。街道をまっすぐ行って、途中で曲がるだけだ。

ちなみに、そのまま街道を真っ直ぐ行くと王都に着くらしい。

迷宮の入り口はただの穴だった。本当に、ただの穴。

「とりあえず入ってみようか？』

そうアリアに話しかけると、自ら穴に脚を踏み入れた。

穴に入ると自分の周りの世界がただの暗い穴から一変し、探しても光源がないのに明るい小部屋に居た。

後ろから突然アリアが入ってきた。「これどうやって出るんだろう。

「これどうやって出るんだ?」

「小部屋で念じれば出られるはずです。ここ以外の小部屋でも大丈夫です。」

念じてみる。 おおー出られた。小部屋に戻る。

「少し進もうか。」

「はい、『主人様』」

奥に進んでいくと獣が出てきた。なんかオオカミっぽい。青の毛並みだ。先手必勝!ってわけで、速攻で弓を出し、矢を出し、つがえて放つ。

一撃だった、前もだけど。おっ!何か落としてる。ドロップアイテムだろうか。

何だろうと思つて近づいてみると毛皮だった。毛は『わざわして硬い。とりあえず拾つておこう。

拾つたら『ポン!』という効果音と共に謎の箱が出てきた。箱を開けると中には凄く広い空間があつた。感覚的に言えばドラ もんの四次元ポケットみたいな感じだ。とにかくいっぱい入りそう。

「『主人様。それは何の箱でしょうか?』

「・・・・俺にもわからん。」

アリアも知らないらしい。毛皮を入れてみよつー多分レアドロップじゃないし!

入れたら消えた、箱が。毛皮もどこにもない。もしかしたら「」と同じかもしれない。念じてみると、やっぱ出てきた。どうなつてるんだ?俺の体。

「また出てきました・・・」

アリアが驚いている。まあ、無理もないだろう。当人の俺も驚いてるんだから。

しばらく道なりに進んでいった。途中で何体かのオオカミにあつたが、いづれも遠くのことでの、オオカミが攻撃する前に矢で仕留めた。

もうちょっと進むと小部屋に出た。ここからも帰れるのだ。ついで戻った。

外に出た俺たちはカルムに続く道を歩いた。青いオオカミの毛皮は14枚集まっている。アイテムを落とさないということは無かつたので、14体倒したことになる。何体倒したかはあのカードに記録されるようなので、アリアも倒さないといけない。

ちなみに、迷宮などのバスモンスター（フロアごとに設置されているボス）は十体分と換算されるのでそれを倒せばノルマは自然と達成となる。アリアのノルマ達成のために、止めをアリアにさせねばいいだろう。

宿へ戻った俺たちは荷物を置いて物件を探しに行つた。一週間分の宿は借りてあるが、早めに探しておかないといい物件は手に入らない。

家の看板がかかっている店に入った。店の中は落ち着いた雰囲気

で奥に恰幅のいこおつちゃんが立っていた。

「今日はどういった御用でしょつか？」

「家が欲しいんですけど・・・」

「どのような家ですか？」

「二人か三人で住むのによじうどいい大きさで、できれば便利なところがいいです。」

「ん~」

店主はかなり悩んでいたが該当する物件が思い当たつたようだ。

「分かりました。ここから歩いて5分もかかるのでついてきてください。」

そう言つとすたすと歩き始めた。店番には既に別の人気が立つて  
いる、さすが慣れてると言つべきか・・・

大体五分後着いたところは街道に出る道から一分も離れていない  
集団集合住宅みたいなところだった。江戸時代とかのあの横に長い  
奴（なまえなんだっけ？）

中は普通だった。ただ広くて何も置かれていない。家具を買わなければならぬいようだ。

「35400メルでいかがでしょうか？」

「ピンきりで。」

値段交渉は大切だ。

「分かりました。」

交渉終了。つーか、こんなにあつさりと買ったなんならもつといけ  
たんじやね？とか思つたが既に交渉は終わっているのでしょうかな

いだらう。村長にもらつたお金も半分以下になつてしまつた。

今日はこの部屋には泊まらずに宿に泊まることにした。家具を買わないと寝れないし今日の宿はもう取つてある。ついでに今日のうちに家具も買つてしまつ。

「アリア、今日のうちに家具を買つておこなうか。」

「はい、ご主人様。ベッドは任せてくれさい！」  
ん？何故にベッド？まあいいか。すげえ張り切つてるし。

金貨を八枚ほど持たせて俺はテーブルなどを買つたために町へ繰り出した。

今は家具屋に居る。既に完成しているテーブルや椅子が並んでいる。

俺はこれから住むであろう家の広さを思い浮かべて家具を選ぶ。テーブルは2種、椅子は3種まで絞つたがまだまだ悩みどころだ。

一つ一つ説明していくと・・・

テーブル

1、質素なテーブル。しかし、手間がかかつていて表面がつるつる。凄く手触りがいい。

2、普通のテーブル。表面にニス的なものが塗られていていい感じ。

椅子

1、これまた質素な椅子。背もたれがついていて座るところが少しくぼんであまあ。

2、質素な椅子。背もたれがついていて座るところが少しくぼんでいる。1より座りやすい。

3、普通の椅子。薄いがクッションがついていて長時間座るのに疲れないのである。

それぞれのこいとこいを出したらこなもんだろうか？

俺的にはテーブルは1、椅子は2がいいが・・・。

よし！即決！買おう。

一人で運べそうだったので、一回に分けて運んだ。最初にテーブルを運び、二回目で椅子を運んでいたらベッドを運び入れている最中だった。ふたつじやなくて一つ。とてもなくでかい。ダブル程度だろうか。

運んでいるのは良くな筋肉がついていそうなおっしゃんだった。おやじく店のお手伝いだろうか。

「アリア、何でベッドが一つなんだ？」

「うつ・・・」

俺は小さくため息を漏らした。

「まあこいよ。」

そう言つてやめないと『ひま』としたような表情で作業を見ていた。

(可憐いんだよなあ。べたべたすぎて困るけど・・・)

心中で苦笑しつつ俺も作業を見ていた。

ベッドを運び終えたのは5分後で部屋の3分の1を占めていた。

それに椅子やテーブルが入っているのでさらに狭く感じる。

宿に戻つて食事を摂つてから宿で眠りについた・・・

## 06話 ～買い物～（後書き）

>補足説明<

クロノ 男 エルフ？

### 装備

グリンディア(弓)、ローブ、布の靴、グローブ

ステータス

L	V	·	7
H	P	4	2
M	P	5	2
A	P	6	4
D	P	6	9

使用魔法 ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、

プラスチックボール(～～ボール)

ゴリアテ(三倍も)

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ  
ステータス

D	P	A	M	P	H	L
2	7	1	5	3	4	v · 5
3	3	3	7	4	2	6

使用魔法 ウォーター・ボール、ヒール

全体的に修正を加えて、今年の更新は終了です。

## 07話 ～覚醒～

朝起きるとまたアリアが俺の腕を抱き枕にして寝ていた。今まで自分を抑えていたが、毎朝続くとつらいものがある。

(ちょっと、仕返しでもしてみるか・・・)

俺は無理矢理体を動かして、アリアの腕から脱出してアリアを抱きしめた。

アリアが気づいて、体を動かしたがもう遅い。

(抱き枕も結構いいもんだ。)

俺はアリアを抱きながら、また、眠りについた。

起きたのは太陽が真上に昇ったころ、ちょうど正午だ。  
そろそろお金の心配もしなければならない。

現在、所持金はまだ10000メル以上あるがお金を稼がないとすぐに底をつくだろう。

今、できそうなことは迷宮でモンスターを狩って素材を売る。依頼を受けて報酬金をもらづ。商人をやる、だ。

とりあえず、ギルドのノルマを達成するために迷宮へと向かおづ。

念じてワープした先は、前に見た迷宮だった。穴に脚を踏み入れると一瞬で景色が変わる。これは結構楽しい。続いてアリアも入つてくる。

「今日で一階層までいければいいな。」

「そうですね。」

歩き始めてすぐにオオカミが出てきた。

「アリア、戦つてしてくれ

「はい、ご主人様」

アリアが片手剣を鞘から出し、構える。

初撃をかわし、首元を狙つて剣を振り下ろす。しかし、その攻撃は剛毛によつてすべて

次にくる爪の攻撃もかわし、もう一度首を狙つた。今度はちゃんと首を捉え、切断する。

「見事だな。」

本当に凄かつた。軽く避けてる。無駄の無い動きだった。

「有難う御座います。でも、ご主人様は一撃で仕留められるでしょう？」

「まあな

それっぽく答えてみた。歩きながら話していると、前からまたオカミが出てきた。

「ちょっと魔法を試したい。少し待つてくれ。」

俺が調べたかったのは、魔法の威力だ。せめて、アリアの剣の攻撃力程度があればいいのだが……。

「ファイアボール……」

自分感覚で握りこぶし一個分の魔力でファイアボールを放った。

放されたのは、通路いっぱいに広がった炎の塊。オオカミへの着弾と同時に消滅したが驚いた。

結果は一撃。消し炭だ。それでもちゃんとアイテムは出てきた。いつもどおりの皮。消し炭から皮が出てきた。何でだろう？

もつと進んで同じ握りこぶし一つ分の魔力でウォーター・ボール、プラス・スト・ボール、サンド・ボールを放つてみたが、結果は同じ。

・・・そうだ！イメージだ！！

今や、魔法の実験に使われているオオカミに小さく、濃密で、としつかりとイメージを固めてからファイアボールを試す。

大きさはサッカーボールほどの炎の玉が目の前に出てきて、オオカミに飛んでゆく。

それは、当たった瞬間に大爆発を起こし木つ端微塵にする。原型を留めてなくともアイテムが出る……なんでだ？

もう少し進むと扉があった。厳つくて王宮にある感じの奴。

「ボス部屋への入り口ですね。」

「入るか。」

俺はそう言つて入つた。慌ててアリアも入つてくる。

中には白い狼がいた。さつきまで戦っていたオオカミとは桁違いに大きい。5mはありそうだ。

先手必勝ということでファイアボールを放つ。フェンリル狼は咆哮した。その衝撃波でファイアボールは焼き消される。

咆哮だけで魔法が焼き消されるのなら、前衛は危ないだろう。

「アリア、下がってる！」

「で、でも！」

「いいから！」

とりあえず、ゴリアテを作つて前衛を任せる。こちらに近づけないようだ。

弓を放つ、狙いは右肩。続けて放つ。

四本放つたところで相手の体勢が崩れる。

チャンスと思い、ゴリアテを近づける。しかし、それは咆哮で消し飛ぶ。

「うわっ、どんな声帶してんだよ。」

もう一体ゴリアテを作り出す。前衛を任せ、俺は左肩を狙う。目的は完全に動きを止める。三本目を放つたところで完全に体勢が崩れた。

なんか、このまま行くとリンクになりそう。

アリアは近づけないし、このまま俺が倒すか？いや、そのままだとアリアの目標達成も厳しいだろう。

考え事をしている間にゴリアテが潰されていた。肩からは矢がす

べて抜けている。

「・・・ツ」

思いつきり体当たりをしてきた。俺は真後ろに吹き飛ぶ、アリア  
が前に出て剣を振るう。

その攻撃は当たる前にアリアは飛んでゆく。

狼は大きな口を最大まで開き、俺を一息で飲み込んだ。

此処は何処だ？

俺は生きているのか？分からぬ。

「きやあああああつ！」

!!

助けなきや・・・  
体が動かない。

『汝、力を欲するか。』

(ああ)

『ならば望め！新しい力を！

解き放て！汝の体の奥底に眠る力を！』

われ

「主人様が食べられてしまった。

どうしよう、どうしよう、どうしよう……  
助けよつ。

「きやあああああつー！」

真上に弾き飛ばされてしまった。すぐに落下の衝撃が襲つてくる  
だろう。

私は目を瞑つた。

強い衝撃がカラダを襲つた。

アリア side out

体中から力がみなぎつてくる。俺は目の前にある壁を殴つた。柔  
らかい感触と共にそれは破ける。

出たらそこは迷宮だった。前にアリアが倒れている。

後ろにはフーンリルが倒れていた。

アリアの意識はなかつた。体中の骨が砕けているのだろう。

ヒトの骨格を思い浮かべる。

「聖なる魔法よー肉體を癒せーヒールー！」

アリアの体の表面的な打ち身から、骨折がすべて治つていいく。

「ふう、終わった。」

体に軽い疲れが襲う。

「水よ、我をきれいに、ウォッシュ。」

体をきれいにした。

「ん、んつ・・・」

「気づいたか。」

「！」

何か凄く驚いている。

「どうした？まだどこか悪いのか？」

「えっ、いや、ご主人様がハイエルフだったので・・・」

「へ？」

ハイエルフといえばエルフの王族である。

そこで話し合い。

普通のエルフとハイエルフの違いはなんとなくわかるらしい。  
ハイエルフは闇を除くすべての魔法を使うことができる。などなど。

一階層の小部屋に入り、街へ戻った。

既に日は落ちかけていたが、落ちきる前に家へ戻ることができた。  
ちなみに今日から家で暮らす。お世話になった宿の人へ礼を言って  
荷物をすべて持つていった。

部屋に戻った俺は、すぐにベッドに倒れこんだ。

倒れこんだらすぐ眠りについた・・・

## 07話 ジャンプ（後書き）

>補足説明<

クロノ 男 ハイエルフ

### 装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ

ステータス

L V . 7	H P 4 2 3	M P 5 2 4	A P 6 4 5	D P 6 9 2
---------	-----------	-----------	-----------	-----------

使用魔法 本人が知っている魔法全て

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ  
ステータス

L V . 6

D P 3 0 3	A P 1 8 3	M P 3 9 4	H P 4 6 6
-----------	-----------	-----------	-----------

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

新年明けましておめでとう御座います。

まだまだ未熟ですがどうぞ今年もよろしく御願いします。

K-Sayuto様、魔法のアイデアを出していただき有難う御座います。

08話 ～探索（街編）～（前書き）

すんません、短いです。

知らない天井だ。テンプレビービーの言葉を呟きつつ体を起こした。

・・・ん？普通に起きることができた。

アリアが居ない？どこへ行った？起きたのか？

寝室を出ると、少し大きめのテーブルに料理が並んでいた。

手前から、サラダ、パン、スープ、キツネ色に焦げがついた肉だ。

「あっ、起きたんですね。」

「ああ。」

アリアは普通に料理ができるようだ。これからは作ってもらおう。

今日は何をしようか？昨日迷宮で殺されかけたばかりだから迷宮には行きたくない。

街を回ろう。うん、それがいい。

料理はどれも美味しかった。しかし、スープに使う塩が少ない。  
言わないべきだろ？

俺たちはアリアの説明を受けながら街を歩いた。

「この街はロクスミッド区、アルスミッド区、グリミッド区、バ

ルグミッシュド区があります。

ロクスミッシュド区には、領主や貴族などが住まいます。アルスマッシュド区は商業をやるために作られた土地です。

グルーミッシュド区は一般の人が住む居住区です。私たちの家もこれに当たります。

バルグミッシュド区は・・・貧困区です。荒くれ者も多いと言われています。私は行つた事はありませんが。」

「ギルドはどの地区にあるんだ?」

「ギルドはどの地区にも属しません。たとえ、ロクスミッシュド区にあっても、バルグミッシュド区にあっても変わりません。」

「やつにえは、冒険者ギルドのほかにギルドってあるのか?」

「はい、商業者ギルド、農耕者ギルド、ハンターズギルド、建設者ギルドがあります。」

「・・・?」

「冒険者ギルドとハンターズギルドの違いってなんなんだ?」

「管轄が違います。

冒険者ギルドは魔物などの討伐依頼を中心に、ハンターズギルドは猛獸の討伐依頼を中心に受注、討伐します。

他に質問はあるでしょうか?」主人様。「

「アリア。」

「何でしう、『ご主人様』？」

「その『ご主人様』って言うのやめられるかな？」

「分かりました。クロノ様、でいいでしょうか？」

「ああ、それで頼む。」

「ん？ 何で言わせないのかって？」

「痛いんだよ、他の人たちからの視線が！」

「奴隸は一般的じゃないのか？」

「はい、貴族は大抵『養子』という形で奴隸を迎えます。人を売買するというところは同じです。」

「ですから、『ご主人様』と呼ばれることはあまり無く『義父様』と呼びます。」

屋敷で呼んでいた呼び方か・・・。

気づいたら結構街中にいた。露店があり、そこから美味しいそうな匂いがしてくる。

最後は暗い話で終わってしまったし、何か食つか。

まず一つ目。今俺が居る位置でもっとも近い露店では串焼きを売っていた。

いい感じに塩味が効いていて皿。白米が欲しくなる。

一つ目。麺類だ。ラーメンの発展途上っぽい。

普通に美味しかった。

三つ目・・・グルメリポートになつてないか?まあ、美味しいからいいか。

ソラして街の探索が終わつた。・・・腹が苦しいぜ・・・。

俺たちは家に戻つた。

この世界では、太陽が落ちたら一日の終わりだ。『今日』はもう終わろうとしていた。

露店でお腹が膨れていたのでもう寝ることにした。

「おやすみ、アリア」

「おやすみなさい、クロノ様」

俺はまだ一線を破れずにいた・・・。

08話 ～探索（街編）～（後書き）

やつぱ短かったですですね・・・。

すみませんでしたm(—)m

次回はもうと頑張ります。感想くれると天井破って喜びます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3470z/>

---

異世界とオレと迷宮と？？

2012年1月10日22時46分発行